

『原論』第 XI 巻テキスト内の注釈・校訂の検討

斎藤 憲

(大阪府立大学)

1 『原論』第 XI 巻の概要

『原論』第 XI 巻は立体幾何を扱う『原論』の最後の 3 つの巻の最初のものであり、28 個の定義と 39 個の命題から成る。ただし、現在使われている Heiberg の校訂版より以前の版には 40 個の命題が収められている。Heiberg は P 写本の記述を根拠に従来の命題 38 を排除した。

28 個の定義のうち本巻にかかわるものは 11 個のみであり、定義 12 (角錐の定義) から定義 28 (正十二面体) までは XII 巻と XIII 巻で扱われる立体にかかわる。

39 個の命題は、大きく 3 つの部分と、12 巻のための 2 つの補助定理に分かれる。

- 命題 1-19: 立体幾何の基本的定理。直線と平面の関係。
- 命題 20-23, 26, 35: 立体角の作図に関する命題。
- 命題 24, 25, 27-34, 36-37: 平行六面体に関する命題。
- 命題 38, 39: 第 XII 巻のための補助定理

2 注釈・校訂をどうやって見分けるか

『原論』への注釈は大量に書かれた。よく知られたものにプロクロス『原論第 1 巻への注釈』があるが、独立した著作を別にしても、『原論』の写本の余白はしばしばスコリア (古注) で埋まっている。しかしここで問題にしているのは、本文と区別して伝わっている注釈でなく、本文に追加され、あるいは書写の過程で本文に取り込まれて、一見しただけでは本文と区別できなくなっている注釈や追加的説明である。

このような注釈は、常に発見できるわけではなく、また確実に注釈と本文を分離できるわけでもないが、「疑わしい箇所」を特定する幾つかの方法があり、実際 Heiberg も第 XI 巻で幾つかの箇所をエウクレイデスのものでないとして、角括弧に入れている。

発表者は特に、何らかの主張を述べた後で「なぜならば」と説明を付け加える箇所¹、および『原論』全体で希な単語を利用する箇所に注目する。

3 後世の追加が疑われる命題

第 XI 巻で後世の追加が疑われる命題は少なくないが、今回の発表では特に、第 XI 巻の冒頭の、平面と直線に関する非常に基本的な命題を検討する。具体的には、

¹これは Wilbur Knorr, “The Wrong Text of Euclid: On Heiberg’s Text and its Alternatives.” *Centaurus*, 36: 208–276 が用いた方法である。Knorr は、『原論』の第 XI 巻の最後の 4 命題 (命題 36–39) と、第 XII 巻の全体で、ポローニヤ写本だけが他の写本と大きく食い違う問題で、他の写本に「なぜならば」という追加の説明が非常に多いことを指摘し、基本的に、後からの追加的説明は注釈のスタイルであるとして、ポローニヤ写本の方が本来のテキストに近いことを説得的に主張した。

- XI.1 一つの直線の一部がある平面内にあれば、その全体がその平面内にある。
- XI.2 相交わる2直線は一平面内にある。とくに三角形は一平面内にある。
- XI.3 互いに交わる二平面の共通切片は直線である。
- XI.7 平行二直線上にそれぞれ一点をとって結んだ直線は平行線と同じ平面内にある。

の4命題である。これらの命題の「証明」はおよそ精密とも説得的とも言えず、その議論は本学会の多くの会員の関心をひくものと思われるが、ここでは証明の議論そのものの評価には立ち入らない。

ここで発表者が論じるのは、これらの命題が、執筆当初のものでなく後から追加された可能性が高いということである。

その論拠は次のようなものである。

- XI.1はXI.2で利用されており、議論の方法が類似していることから、この2つの命題は同じ起草者によって同時に書かれたと考えて良い。しかしこれ以外でこの2命題が用いられているのは、XI.1がXI.16で、XI.2がXI.6, 8で利用されている箇所だけである。
- まずXI.16でのXI.1の利用と思われる一節は、テオン版諸写本で最も良いテキストを伝えるF写本で本文がなく、欄外に書かれている。
- XI.6は、「直線 $\Delta B, \Delta A$ がある平面内に、直線 AB もある」という文章の後に、「というのはあらゆる三角形は1平面内にあるから」という説明が追加される形でXI.2が使われている。これは後からの追加である可能性が高い。XI.8におけるXI.2, XI.7の利用も同様に「後からの説明」による。
- XI.7は、一対の命題XI.6, XI.8の間に置かれている。この不自然な位置は、XI.7がXI.8で利用されていることによって説明できよう（ただし、その議論は明確でなく、確実ではない）。いずれにせよ、XI.7が非常に基本的な命題であるのに、第XI巻の最初に置かれていないのは、この命題の必要性を感じた誰かが追加した可能性を示唆する。

4 まとめ

第XI巻は、今日「立体幾何の基礎」として片付けられ、顧みられることの少ない部分であるが、ここで指摘した以外にも後世の追加と思われる記述を多く含み、古代において熱心に研究されたことがうかがわれる。また、ここで後世の追加と考えた直線と平面の基本的な関係に関する（きわめて不完全な）命題も、立体・空間の認識の歴史という観点からは研究の余地があろう。